

視 点 子どもをとりまく生活環境—児童学の視点から— 1

◆シリーズ開始にあたって◆

いま、子どもをとりまく生活環境は大きく揺れ動いている。現代の日本の動き、世界の動きに目を向けると、具体的にどのような問題・課題が生じているのだろうか。このシリーズでは、一般的な動向や個々の多様性に言及しながら、危機的な問題状況あるいは発展的な状況について、実践総合科学としての家政学における児童学の視点から、6回にわたって多角的にアプローチしていく。それぞれのテーマ（仮題）は各分野で活躍なさっている執筆者の方々に設定していただいたものである。1. 生み育ち合い（大瀧ミドリ）、2. 学校と地域における人間環境の破壊（深谷和子）、3. 「共に育つ」ということ（武藤安子）、4. 子どもの発達と「時間」のかかわり（岡野雅子）、5. 子どもたちの成長発達と都市環境（山内昭道）、6. 子どもの権利条約と子どもの現状をめぐって（熊沢幸子）。このシリーズをきっかけに、家政学会での児童学研究あるいは学際的な共同研究が活発になることを願ってやまない。

生 み 育 ち 合 い

大 瀧 ミ ド リ

1. 子育てに関する価値観の変化

近年、子どもと子どもを取り巻く環境には、国際的にも国内的にも急激な変化が生じている。国際的な変化としては、「世界人権宣言（1948）」の実践化ともいえるべき、「女子差別撤廃条約（1979）」や「子どもの権利条約（1989）」の国連総会採択、「国際児童年（1979）」や「国際家族年（1994）」の決定、さらに、「男女労働者：家庭的責任を有する労働者の機会均等及び平等待遇に関する条約（1981）」のILO総会での採択などが指摘されよう。差別撤廃を基本理念とした国際的な動きの中、日本でもこれらの条約批准や批准に向けた動きが起こっている。これらの動きを加速する役割を果

たしたのが、出生率の恒久的減少である。子どもを労働力や福祉の担い手と考える行政にとって、出生率をあげることが重要課題となった。そのため親たちは、長い間の念願であった「育児休業法」をはじめ「保育所の流動的な運用」「地域の子育て環境の整備」「保育の多様化の容認と対応」「児童手当の支給拡大」など中味はともかく、多くのメニューを短期間に手にいれることができた。さらに、「1.57ショック」と行政をして言わしめた1990年の出生率は、子育て行政の中心をなしてきた「母親重視」の考え方を、大きく転換するきっかけを提供した。現代の子育て環境における変化は、人間観、子ども観、子育て観など、価値観の転換を伴っている。そのため、今まで信じられてきた子どもを生み育てることに関する仮説や価値観などのすべてを吟味してみる必要性が生じている。

ここでは、変化の1つでもある子育ての役割を母親だけでなく、父親や親以外の人々にも広げることがを支持する研究をとりあげ、今後の課題について考える。

Midori OTAKI 上越教育大学教授

著者紹介〔略歴〕昭和40年東京家政大学家政学部児童学専攻卒業。昭和42年日本女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修了。昭和42年東京家政大学助手、昭和48年同講師、昭和56年同助教授。昭和59年上越教育大学助教授。平成6年より現職。〔専門分野〕親子・家族関係、家庭教育、性役割、保育教育など。〔連絡先〕〒943 上越市山屋敷町1（勤務先）。

2. 子どもの発達の可能性

藤永¹⁾は、親から長期間、育児放棄されていた2人の子どもの発達を取り戻してゆく過程を分析し、愛着対象を母親に特定したり、臨界期を想定することができないことを明らかにした。2人が5歳と6歳で救出された時の心身の発達状態は、1歳児にも相当しない程であった。救出後、手厚い養護を受け、保母に強い愛着を示すようになると言語や社会性などに急激な発達が認められた。しかし、思考に関する言語機能など、発達を取り戻すことができない面もあった。現在、彼らは高校を卒業し、それぞれの道を歩んでいるとのことである。

この事例は、人間の発達が予想をこえた可塑性を持ち、愛着の形成が子どもの発達に非常に重要であるが、愛着対象は母親である必要性が無いことを明らかにした。

ところで「親子関係」と銘うった研究の多くが、母子関係だけを扱い、父親を無視してきた理由について、Lamb²⁾は「母親が子どものほとんどの面倒をみているため、母親こそ、子どもたちの発達にもっとも重要な影響をもつに違いないという仮定を生み、母がもっとも重要であるという全くもっともらしい結論が生まれ、母親のみが、子どもの人格発達に重要な影響をもつものであるという理屈にあわない推論へと飛躍してしまった」と指摘している。Lambの言うように、研究が社会通念等の価値観に大きく規定されることを、多くの先行研究に見ることができる。ここでは、子育てと性役割に関する研究にその例を見てゆく。

3. 子育てと性役割

Parsons³⁾は、1950年頃のアメリカの中流家庭の生活実態から役割構造と子どもの社会化について理論化した。親役割を家族の情緒的関係を維持する表出的役割(母親)と家族の生活を充足する道具的役割(父親)にわけ、親と子どもの間には力の次元を想定した。性と世代の2軸から家族の役割構造を説明するとともに、子どもは同一視により役割を取り込み社会化されるとした。この考え方は、順応的で、性別役割を肯定したものである。その後、女性解放運動、女性の就労率の上昇、離婚による父子家庭の増加など、否応なしに父親が子育てに関わる事態が生じた結果、育児を楽しむ父親も出現するようになった。この事実は、父親も表出的役割を担いうることを示し、表出的役割と道具的役割を一次的にとらえられないことが明らかに

なり、表出的役割と道具的役割を統合するアンドロジニー(両性具有性)の考え方が受け入れられるようになった。この考え方を示唆する研究を次に見ることにする。

花沢・松浦⁴⁾は、大学生(男子168名、女子201名)を対象に、感情項目、接触要求項目、各学校段階における乳児接触経験を調査し、乳児に対する愛情や世話をしたいという思いは、性別に関係なく、乳児を世話した経験の量に依存することを明らかにした。

「あたたかい」「うれしい」など肯定的感情語(接近感情)14語と「弱々しい」「あつかましい」など否定的感情語(回避感情)14語について4段階評定した。接触要求項目は、「触れたい」「おんぶしたい」など14語で、3段階評定した。各学校段階別に「おんぶした」「添い寝した」など15項目の乳児接触経験について3段階評定した。肯定的感情語得点と、否定的感情語得点の差から愛着得点を算出した。結果の分析は、乳児接触経験により多・中・少の3群にわけ、各学校段階別に他変数との関連を見た。その結果、子育てに必要な心情は性的要因ではなく、子どもと接する経験により培われることを明らかにした。つまり、この結果は、乳児接触経験を豊かにすることで女性にも、男性にも表出的役割を育むことができることを示している。

Field⁵⁾の研究結果はさらに興味深い。対象は、4カ月の乳児36名と子育てに主たる役割を負う父親12名、補助的な役割の父親12名、子育てに主たる役割を負う母親12名である。いずれの親も白人で大卒で中流家庭に属している。子どもと親の関わりをビデオにとり、「話し掛け」「微笑」「笑いかけ」など10種類の行動の頻度を見た。その結果、父親が主たる役割を負うか否かによって、父親の子どもに対する行動は顕著に異なった。そして、主たる役割を負う父親と主たる役割を負う母親の行動は非常に類似していた。つまり、子どもとの関わりにおける父親と母親の違いは、性の違いに起因するものではないことを明らかにした。

Vandell⁶⁾も、父親と母親の類似性を認める結果を見いだした。対象は、12組の16カ月の男児とその両親である。半統制的場面における親子の自由遊びをビデオに録画し分析している。実験室にはクレヨンと画用紙、絵本など4種の玩具を用意した。親子の相互作用の分析には、「身体接触」「ジェスチャー」など7種の行動分析カテゴリーと「肯定」「説明」などの7種の発話内容分析カテゴリーを使用し、その他にも社会性を測る尺度など数種の尺度を使用した。その結果、

「肯定」と「教訓」的な発話は、父親より母親に有意に多いものの、これ以外の行動には父親と母親の間に差は見られなかった。

大瀧⁷⁾は、妊娠初期の夫婦 13 組を対象に、妊娠初期の胎児の映像を視聴する経験が、わが子への感情に与える影響を、心拍と質問によって調査した。その結果、心拍数の上昇する映像や印象的であったとした映像は、男性と女性で類似する傾向があることを見いだした。

育児休業をとった父親の以下の発言は、具体的な交流がわが子への愛情を育てることを示している。

「子どもとつきあうのは根気が必要ですが、結構いい気分転換にもなります。毎日が発見の連続です。育児は楽しいけど、自分の拠り所がそれだけでは精神的にめいる。専業主婦の大変さがわかったような気がする。父親も、母親並に育児はできる。子育ての楽しさを、母親に独占させるのはもったいないし、2人でやった方が楽しい」(読売新聞1993.5.27)

以上の結果は、子育ての役割に求められる行動等に性に固定化されたものではないことを示している。

大日向⁸⁾は、子育て機能を現す用語である母性、父性、親性は、父親と母親を分断し、親と親でない人を分断するため適切でないとし、子どもの発達に理解と関心を抱く誰にでも使用可能な「育児性」を使用することを提唱している。この指摘は、アメリカの用語の使われ方にも見ることができる。最初使用されていたマザリングにファザーリングが加わり、その後、性を特定しないペアレンティングが使われ、さらに、親を特定しないケア・テイカーやケア・ギヴァーが使われるようになった。アメリカの研究が日本に紹介されるとき、ケア・テイカーやケア・ギヴァーは、「母親」と訳されることが多いため、このような気付きを遅らせたと言える。子育ての社会的支援は、子育てを父親と母親に閉じ込めるためではなく、親でない人々と共有することにあることを考えた場合、大日向の指摘は重要な指摘といえよう。

先に見たVandell⁶⁾は、集団保育の経験が親子関係を活発化するだけでなく、子どもの能動性を増すことを見いだしており、子どものためにも、親のためにも子育ての場を開放することの意義は大きい。

では、子育てが性に付随する役割でないならば、必要とされる能力などはどのように育てられるのだろうか。

4. 子育て役割の発達

大日向⁹⁾は、初妊産婦 156 名を対象に、妊娠中と出産後 4 カ月の 2 回、質問紙調査を行い、母性の発達について詳細な分析をした。母体の回復の状態、育児への自信、疲労度、育児中の心理的安定度、赤ちゃんへの愛着の程度、自分自身の変化に対する受容、夫婦関係の在り方への影響を調査し、「妊娠にきづいたとき」「つわりのとき」など 15 の時期におけるわが子への愛着を 6 段階評定した。夫婦関係は「体を気遣って優しくしてくれるのが嬉しい」「いつまでも新鮮で魅力ある妻でいたい」など 10 項目から複数回答。心理的安定度は「育児ノイローゼになりそうである」「育児に振り回されて自分がだめになりそうな気がする」など 4 項目について 4 段階評定した。

その結果、愛着が安定した増加傾向を示すのは子どもの誕生後であり、妊娠に対して肯定的な母親は、わが子への愛着が積極的であった。夫に対する感情が否定的なものは肯定的なものより育児不安が強く、母親と子どもの関係に夫婦関係が影響することを明らかにした。また、母親としての意識や感情は、母親の学歴や就業形態、年齢などにより種々の変容をとげ、普遍的・画一的でないことを明らかにし、母親としての発達を検討する場合、母親自身の生活状況との関連を見る必要性を指摘した。

発達が時間軸に沿って進むことを考えると、縦断的な研究の意義は大きい。次の研究は、4 カ月から小学校入学まで継続研究されたものである(服部・原田¹⁰⁾)。

調査対象の市で 1 年間に生まれた全乳児(約 2,000 名)とその母親について、4 カ月、7 カ月、11 カ月、1 歳半、3 歳半、小学校 1 年の 6 時点で、検診と 400 項目にわたる調査を行った。その結果、母親の出産以前の育児経験は「全くない」が約 40%、「たまに」が約 35%、「よくあった」が約 21%であった。子どもの欲求の理解(赤ちゃんがなぜ泣いたり、むずかかったりするのかわかりますか)は、4 カ月時 64%、3 歳半時には 96%と、急激に上昇した。しかし、育児に対するイライラは、子どもの成長につれ増大する傾向があり、育児不安の時期と内容は、子どもの年齢による変化が顕著で、異なる援助の必要性を示唆した。また、第 1 子と第 2 子以上の子育てを比較すると、第 2 子以上の子どもにかかる時間は少ないものの、第 2 子以上の子どもの方が泣きやむずかりから子どもの欲求をよく理解することができ、育児不安も少ないことを明らかにした。

このような子育てにおける学習効果は、女性に限定されるものでないことは、先に見た花沢らの結果からも明らかである。男性や女性は、親役割をどのように発達させ、親役割の発達とその人の個人としての発達はどのように関連しながら発達するのか、など実証的研究が求められる。

前述した研究は、親子の関わりを子どもと父親、子どもと母親の2者関係として見ているものが多い。しかし、これらの関係は、父母子の3者関係の中の2者関係として存在しているものであり、単独の関係として存在しているわけではない。3者関係としてとらえている研究を次に見ることにする。

5. 3者関係としての親子関係

Lytton¹¹⁾ は、136名の25～35カ月の男児（平均月齢32.4カ月）とその両親を対象に、家庭訪問を2回、3時間行い、日常生活場面での親子の相互作用を観察した。親子の行動の観察は、「C02M5C」などと、小声でテープレコーダーに録音しながら行った。なお、「C02M5C」は、実際の行動である“child(C) goes to(02) mother(M) quickly(5) in compliance with her request(C).”をコード化したものである。2名の観察者の一致率は76.9%であった。親のしつけ的な働き掛けに子どもがどのように反応し、子どもの反応に親がどのように反応するかを見るために、親の働き掛けを「命令・禁止」「指示」「理由言及」に、子どもの反応を「従順」「不従順」「いずれでもない」に、子どもの反応に対する親の反応を「身体的接触」「否定的行動」「肯定的行動」「情緒的でない行動」に分類し、父親の同席の有無による差異を検討した。その結果、父親が同席した時の方が、母親は子どもの従順さを肯定し、また子どもが不従順であるときでも不従順さに対して寛大であるというように、子どもに対して有意に友好的であった。これは、父親が同席することにより、母親が子どもへの責任を軽減できるためであると説明している。この研究でも、父親と母親の子どもへの関わり方に、有意差は見られなかった。

この結果は、父母子の3者関係から2者関係だけを抜き出して研究することに問題があることを明らかにした。しかし、親子を3者関係あるいは多者関係としてとらえた実証的研究は極めて少なく、方法論を含めて今後の課題と言えよう。

6. 性役割意識における性差

具体的な子育てにおける父親と母親の類似性を示す研究は多いが、意識に関しては明白な差異を指摘する研究が多い。

旭化成の共働き研究所は、研究所の雑誌の購読者（1,429名）の期待する子ども像を調査した¹²⁾。「勉強ができる」「仕事ができる」など30項目から、男子と女子に期待するものを5項目選択するよう求めた。その結果、男子に期待する項目は男性と女性ではほぼ同じであった。しかし、女子に対しては、男性は「気立てがよい」「かわいい」などを期待し、女性は男子に期待するものとほぼ同じものを期待していた。男性の伝統的な性役割意識の背後にあるものを明らかにする必要がある。

7. その他の生み育ち合いに関する問題

目まぐるしいほどの生殖科学の進歩は、親となる可能性を広げただけでなく、自己や他者に対して「生めない」ことを容認しにくい状況をつくりだし、不妊治療の名のもとに長い生殖可能年齢の期間を産むことのためだけに費やす危険性をもたらしめている（Klein¹³⁾）。多くの犠牲を払ってまで「わが子」にこだわる、あるいは「こだわらされる」状況を生み出している要因を明らかにする必要がある。

また、早期教育に走る母親の多くは、自己実現の手段として子どもを使い、母親の夢の実現を子どもに託す場合が多い（保坂¹⁴⁾）。このことは、母親だけでなく、父親も含めて個人、親、妻、夫などの多様な役割を個人の中で旨く調整した生き方を難しくしている生活実態の現れと言えよう。特に、専業主婦の方がフルタイム就業の母親よりも子育てに対する否定的感情や不安が強いと言われており（大日向⁹⁾）、多様な子育てを認めあう、社会的支援の在り方が検討される必要がある。

さらに、前述した親子の相互作用の分析は、外から観察可能な行動や、あらかじめ研究者が定めたカテゴリーについて行ったものである。このような分析に対して、行動の意味を対象者の側に立ってとらえる「発達の体験（津守¹⁵⁾）」や「成り込み（鯨岡¹⁶⁾）」と言われる観察結果に基づいて、分析する必要性が指摘されている。客観的分析と意味理解に基づいた分析を統合した研究方法の確立が必要と言えよう。

引用文献

- 1) 藤永 保, 斎賀久敬, 春日 喬, 内田伸子: 人間発達と初期環境, 有斐閣, 東京 (1987)
- 2) Lamb, M. E. (宮本美沙子訳): 情緒と対人関係の発達, 金子書房, 東京, 29~46 (1981)
- 3) Parsons, T. and Bales, R. (橋爪貞雄ほか訳): 家族, 黎明書房, 東京 (1981)
- 4) 花沢成一, 松浦 純: 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 356~357 (1986)
- 5) Field, T. : *Dev. Psychol.*, **14**, 183~184 (1978)
- 6) Vandell, D. L. : *Dev. Psychol.*, **15**, 379~385 (1979)
- 7) 大瀧ミドリ: 農村生活研究, **37**(2), 15~19 (1993)
- 8) 大日向雅美: 母性から次世代育成力へ (原ひろ子, 館かおる編), 新曜社, 東京, 205~229 (1991)
- 9) 大日向雅美: 母性の研究, 川島書店, 東京 (1988)
- 10) 服部祥子, 原田正文: 乳幼児の心身発達と環境, 名古屋大学出版会, 名古屋 (1991)
- 11) Lytton, H. : *Dev. Psychol.*, **15**, 256~268 (1979)
- 12) 旭化成共働き研究所: *DEWKS*, **21**, 10~12 (1993)
- 13) Klein, R. D. (フィンレージの会訳): 不妊, 晶文社, 東京 (1991)
- 14) 保坂展人: 危ない公文式早期教育, 太郎次郎社, 東京 (1994)
- 15) 津守 真, 本田和子, 松井とし: 人間現象としての保育研究, 光生館, 東京 (1974)
- 16) 鯨岡 峻, 鯨岡和子: 母と子のあいだ, ミネルヴァ書房, 京都 (1989)